

( 続紙 1 )

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	阿部麻美
論文題目	現代インドにおけるダリトのキリスト教改宗 ータミル農村社会のパライヤルの宗教実践ー		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、インド南部タミル農村社会におけるパライヤル (「太鼓叩き」を伝統的職務とするダリトのジャーティ) を対象に、現代インドにおけるダリトのキリスト教改宗とはいかなるものか、を考察する。ダリトの日常を取り巻く政治経済や社会環境の変化に着目しつつ、ダリトが宗教実践を通じて紡ぐ世界を、複数のダリト村落での臨地調査をもとに民族誌として記述する。</p> <p>第1章では、調査対象のパライヤルが暮らすタミル地域の各農村の概略を説明する。いずれも近年設置された工業地帯の後背地にあり、独立教会へのダリトのキリスト教改宗が急増している点で共通している。</p> <p>第2章では、タミルナードゥ州の政治経済的な政策の変遷と社会への影響について振り返る。農地改革や緑の革命、留保枠の拡充や福祉政策を検討し、それらがいかに農村社会に影響を与えたのかを考える。最後進階級によるダリトへの残虐行為、それらに起因するダリト運動にも考察を広げ、本論文の射程となる1980年代以降の改宗における時代背景を考察している。</p> <p>第3章では、各調査村で行った戸別世帯調査をもとに、ダリトの就業形態や経済活動の変化を検討する。得られた結果から、ダリトの就業形態は、1980年代から1990年代にかけて年季契約の専従的な農業労働 (アディメーガル労働) から日雇い労働に移行し、農村社会の構造変化が進んだこと、さらに2000年以降は、臨時雇い工場労働や小作農への参入が進むなどダリト世帯の生計手段が多角化していったことを明らかにしている。それに伴い、ダリトの経済機会は格段に向上するが、ダリト世帯間で格差が急速に拡大していることを論じている。</p> <p>第4章では、インド独立後の1950年以降、タミルナードゥにおけるダリトのキリスト教改宗が進展する素地を形成した米国のプロテスタント教派の宣教過程について考察する。これまでダリトは、西洋の宣教師団の提供する経済的恩恵や教育に「魅了」されて改宗する、もしくはカーストに由来する差別や抑圧への抵抗として改宗すると理解されてきた。本章では、宣教師とダリトとの全人的なつながりの重要性などの新たな解釈の可能性について議論している。</p> <p>第5章では、1980年代末から1990年代初頭に生じたダリトの集団改宗について考察する。ある調査村では、ダリトの経済的上昇に伴う支配カーストの焦燥、ヒンドゥー至上主義運動の伝播など農村社会の変動が伏線となり、ヒンドゥー神への供犠儀礼にお</p>			

いて、支配カーストが侮蔑的にダリトの存在を否定したことに端を発し、村落規模の暴動が勃発、ほぼすべてのダリトがキリスト教徒に改宗した。さらに、改宗したダリトたちは既存の教派に参入するのではなく、新たに独立教会を設立し、信仰の基盤を構築した。集団改宗の歴史の描写を通じて、ダリトが既存の社会秩序に異議申立てをするに至った過程が鮮明かつ詳細に検証されている。

第6章では、近年、独立教会がペンテコステ派化している実態を明らかにする。2000年代以降拡大するダリト間の経済格差が在地の死霊言説や邪術への恐れを増幅させている。こうした恐れに対応しうるものとして、ペンテコステ派の実践を独立教会は取り込んでいく。ペンテコステ派化が呼び水となって、独立教会はダリトのキリスト教改宗者を増やしているのである。独立教会は、死霊言説を時に利用し、巧みにかわしたりしながら、他のダリトに先んじて富むことを否定せず、グローバル資本主義の格差による持つ者と持たざる者との分断に対抗する新たな共同性を創出している。

第7章では、聖霊による恩寵の働きを重視するペンテコステ派的宗教実践において、独立教会のダリトたちが、1990年代に「ダリト性（被抑圧性）」の象徴として禁止したパライ（太鼓）の技法を、自らの身体に聖霊を降臨（憑依）させる方法として取り込んでいることを明らかにする。葛藤や苦しみ、焦燥の中で生きる寄り処を聖霊の恩寵に求めるダリトが紡ぐ新たな宗教実践は、パライヤルの身体的な共同性に支えられていることを示唆している。

以上の考察を踏まえ、本論文では結論において、ダリトのキリスト教改宗は、既存秩序への批判を含みこみながら、絶えず変動する世界に自己を位置づけなおし、生きられる世界を共同性のもとで構築しようとする創造的な営為であると定義づけている。